韓国の近代化と女性
―「妓生」と「遊女」、そして「女給」を手がかりとして―

金　　多　希

はじめに

近代以前、韓国の女性たちは、儒教規範を守り、女の身を立派に守ったものだけが尊敬され、理想の女性と崇められた。しかし、近代化とともに西洋から入ってきた自由や平等思想に基づいた新しい教育を受ける者が増えることによって、女性の意識にも変化が訪れた。とりわけ、自分の意思で結婚相手を自由に選択できる権利を知った女性たちはこぞって自由な愛を求めるようになった。いわゆる「旧女性」に対する「新女性」と呼ばれる女性たちが表われたのである。「新女性」たちは、長い間自分たちを縛っていた儒教規範から逃れるために西洋の新しい結婚文化や自由恋愛風習を積極的に取り入れた。

しかし、自由恋愛の波に晒されたのは近代教育を受けた「新女性」だけではなかった。社会の関心が届かなかった下層民、とりわけ「妓生」や「遊女」、「女給」といった「花柳界の女性」たちもその影響を受けた。

そもそも「花柳界の女性」は、結婚制度の枠からはみ出した社会的弱者であった。しかし、近代化とともに社会の前面に躍り出て、むしろ自由恋愛に関しては一般女性をリードするなど、近代の流行と消費の先頭に立ち、社会的に影響力を持つ女性として世間の注目を集めるようになったのである。

そこで本稿では、韓国の近代史において最も魅力的な女性の一人、あるいは体制を揺るがした女性の一人と言われる「妓生」や「遊女」、「女給」といった「花柳界の女性」に注目し、社会的弱者に過ぎなかった彼女たちが、なぜ社会の注目を集めるようになったのか、その実態を明らかにしたい。

1. 妓生、時代の寵児になる

近代以前の韓国には、「花柳界の女性」を代表するものとして「妓生」と呼ばれる女性たちが存在した。妓生には「官妓」と「私妓」の二種類があり、とりわけ「官妓」は時調の朗吟、歌曲、舞踊、楽器の演奏をし、詩・書画に優れた者が多かった。それゆえ妓生は「総合芸術家」とも言われた[1]。その代表的な例として、朝鮮時代の女流詩人として知られている黄真伊[2]（？-？）や「列女」を超えて義人と言われる論介[3]（？-1593）、また、古典小説の主人公の中で最も有名な『春香伝』の成春香[4]などがあげられる。彼女たちは国に属した「官婢」ではあったが、売春を目的とせず、あくまでも歌舞を披露し、支配層の男性たちと漢詩を交わしながら酒席の雰囲気を盛り上げることが求められた。よって、妓生は音曲・詩歌だけではなく学問なども必要とされた[5]。そんな彼女たちを世間では「解語花[6]」と評したが、そのような妓生の姿は19世紀末海外から朝鮮を訪れた多くの外国人にも注目されていた。次の文は1894年から1897年にかけて度々朝鮮を訪れていたイギリスの女性旅行家イザベラ・バード（Isabella Lucy Bird、1831-1904）の見た妓生の姿である。

> 平壌はむかしから妓生の美しさと優秀さで有名である。妓生とは歌舞のできる女のことで、いろいろな点で日本の芸者に似ているが、正確にいえばその大半は政府の所属で国庫から俸給をもらっている。わたしが最初と二度目にソウルに滞在した当時は、七〇人ばかりの妓生が王宮に雇われていた。妓生は宮廷楽士とおなじ省の管轄を受けている。（中略）妓生はごく幼いころから、様々な楽器の演奏、歌舞、読み書き、詠唱、手芸など、ほかの朝鮮女性には欠けていて妓生としての魅力を高めてくれる教養やたしなみの訓練を受ける。妓生の定めは上流階級の男性に楽しいひとときをすごさせるところにあり、朝鮮人

男性は自分の妻の知性がどれほど開発されていなくともおかまいなしなのに、妓生にはこれだけの教育が不可欠なのである。妓生はつねに美しく装っており、平壌のどろだらけの道を通ってわたしに会いに来たときですらそうだった。また蟄居（ちっきょ）とは無縁であるので、女性に対しても男性に対しても落ち着いて品のあるものごしを忘れない。妓生の舞は東洋諸国のおとりの大半がそうであるように、ポーズをとるのがおもで、鑑賞したことのある外国人によれば、下品なところはなにひとつないとのことである[7]。

バードの目に映った妓生は、身分こそ低いが、朝鮮の一般の女性には欠けている教養と魅力、そして品性を備えた特別な存在であった。

【図 1】18 世紀の画家、申潤福が描いた妓生の姿「聽琴賞蓮圖」[8]

【図 1】のように、実際、妓生の中には優れた文才が認められ朝鮮を代表する女流詩人として活躍するなど、男性中心社会の朝鮮社会に女性の存在を残す人物となった者もいた。

しかし、近代化にともなって妓生たちの生活は一変した。賤民という身分から解放され、自由の身になった[9]妓生たちは、新たに世間の注目を集めるようになった。そのきっかけとなったのは、『毎日新報』が 1914 年 1 月 28 日から 6 月 11 日まで、当時、朝鮮の一流の芸人妓生を紹介する記事を連載した「藝檀百人」であった。この記事によって、妓生の一挙手一投足に関心が集まり、それまで支配階級の男性の相手とされていた妓生たちが一般男性も相手にせねばならないようになってきたのである。いわゆる「妓生の大衆化」である[10]。この妓生の大衆化を煽ったのが『京城日報』の記者、青柳網太郎（1877-1932）である。彼は朝鮮研究会の仲間とともに、朝鮮全国に散らばっている 605 名の妓生の情報を集めた『朝鮮美人宝鑑』（1918）を発刊した[11]。この宝鑑が当時の朝鮮社会に大きな反響を及ぼした。その端的な証拠が、【図 2】のような妓生を育てる妓生養成所、すなわち「妓生学校」が各地に作られ、日本式の剣番制度などが各地に組織されたことである。

【図 2】平壌の妓生学校[12]

その結果、1910 年代頃から妓生は社会の至るところで見られるようになった。もはや妓生は芸術を花咲かせた「総合芸術家」としてではなく、商品として注目されるようになったのである。

【図 3】1930 年代絵葉書モデル張蓮紅[14]

例えば、朝鮮一の美人と言われた平壌出身の張蓮紅（1911- ？）【図 3 参照】、日本人の青年と東京銀座へ逃亡したとされる盧銀紅（？ - ？）、1926 年に韓国を訪問したスウェーデン皇太子グスタフ 6 世アドルフがその踊りに感心したと知られる金玉蘭（？ - ？）、16 歳に大衆歌手としてデビューし、1935 年代最も人気のある歌手として

選ばれた王寿福（1917-2003）【図４参照】などは、絵葉書や絵画の人気モデルとして、また新聞や雑誌の広告モデルとして、歌手や俳優として大活躍した[15]。

梨專演劇의밤
超滿員의大盛況
몰리듈專屬歌手
音樂實演의밤
九日公會堂에서

【図４】1933 年王寿福が出演した舞台の記事[16]

2. 自己主張する妓生たち

妓生たちは本業のほかに、博覧会など公の場で歌舞を披露し、絵葉書や新聞、雑誌などの広告モデルとして大衆的な人気を博すだけではなく、中には近代朝鮮を象徴する活動で世間の注目を集める者も現われた。その代表的な妓生として、富豪の息子との結ばれぬ愛を悲観して自殺したことでメディアを沸かせた康明花（1900-1923）、最初に断髪を始めたことで有名になった姜香蘭（1900-？）、ホテルを建て財閥と言われた金玉嬌（1904-？）たちをあげることができる。

中でも注目したいのは、女性の生き方に強い影響を与えた妓生が出現したことだ。前述の如く、韓国の女性たちは儒教的家族制度の中で独立した人権が全く認められず、男性によってその生涯が決められていた。それゆえ西洋から自由恋愛など新しい結婚文化が入ってきても、女性にはそのような習慣を決して認めようとしない社会的風潮があった[17]。それに対して、結婚制度からはみ出した生を生きる妓生たちにはそうした縛りはなかった。よって、妓生たちは一般女性に先駆けて自由恋愛など西洋の新しい恋愛文化を取り入れ、それを実践することができた。つまり、妓生は自由恋愛に関しては一般女性をリードする立場にあったのである。近代になっても自由恋愛ができなかった多くの一般女性は妓生たちの自由な生き方に憧れ、メディアも妓生の恋愛を頻繁に取り上げた。しかし、そもそも結婚制度の枠からはみ出した生を生きる妓生たちの恋愛はその先にある結婚へと続かなかった。したがって、妓生の中にはそれを悲観して自殺する人が絶えなかった。

1920 年代当時、最も人気のあった妓生の一人であった康明花は、大富豪の息子と自由恋愛をしたものの、妓生と言う身分ゆえに結婚が許されなかったことを苦に自殺を図った。当時メジャーなの新聞や雑誌は連日のように康明花の自殺を取り上げ[18]、【図５参照】自殺に終わった妓生のラブストーリを大いに盛り上げた。

꽃가튼몸이
생명을산
귀사지에
그네의생활에는엇더한비밀
이잇섯던가—강명화의애화
알어난것

【図５】妓生康明花の自殺記事[19]

注目すべきは、妓生の自由恋愛の実践と自殺に近代教育を受けた「新女性」たちが強く反応したことである。その一人の羅蕙錫（1896-1948）は、『東亜日報』に次のようなコラムを掲載している。

> ‘私（康明花、注釈：筆者）はあなたと離れては生きていけない。あなたは私と一緒にいると、家族も世の中も全てが敵に廻ると言っている。だから、愛のために、そしてあなたのために、命を絶つことは正しい選択でしょう’と言ったそうである。どれほど悩んだ末に発した言葉なのか、涙が溢れ出る。
>
> 私は‘自由恋愛’問題に触れる時、朝鮮の女性の中で恋愛ができる人は妓生しかいないと話してきた。女学生は男女交際経験がない。したがって、この朝鮮で恋愛が出来るのはもっぱら妓生の世界のみである。妓生は女学生と違って、男性を選ぶ判断力と大勢の男性の中でたった一人だけを好きになる機会があ

る。よって、その愛は自動的かつ永久的である。対する女学生はそのような機会に恵まれていない。それゆえその愛は受動的かつ一時的である。よって、朝鮮の女性として真の愛が分かる者は妓生のほかにいないと言える。（中略）

このような悲運に耐えられず恋愛を全うするために、純粋で固い志を守るために、自分の精神の質素さを表すために、世間に怒りを見せるために、自殺を実行したわけである[21]。（拙訳）

「新女性」の第一世代である羅蕙錫は、当時の社会で真の愛が分かる者は妓生しかいないと指摘し、自由恋愛の実践の末に自殺した妓生の生き方は、様々な制約によって自由恋愛が実践できない女学生をはじめ一般女性に大きな影響を及ぼしたと述べている。つまり、康明花の自殺は、自由恋愛に憧れる一般女性を大いに刺激していたが、妓生が当時の社会に与えた影響は自由恋愛だけではない。

また、姜香蘭という妓生は青年文士との出会いをきっかけに妓生を辞めて近代教育を受けた。それによって女性問題に目覚めた彼女は、「女性解放」を訴えるため男性のように生きることを宣言し、断髪をして「男装の麗人」となった。【図6】のように姜香蘭が決行した断髪は、当時の社会に大きな反響を呼んだ。

【図6】男装の麗人姜香蘭[23]

次の文は断髪した直後の彼女の行動を報道した新聞記事である。

彼女はついにある決心をした。「私も人間であり、男性と同じように生きていく堂々とした人間である。男性に頼ったり、または、他人に同情を求めたりするのは根本から間違ったことである。世の中の議弄は自分のことを知らないためであり、その苦痛も知らないためである。」斯くして、彼女は男性と同じく生きようとする意味で、14日午後市内廣橋にある中国理髪店で髪を剃って男性のスーツを着用した。培花学校では髪を剃った女学生は学校に通えないと、彼女を退学処分した。よって、彼女は西大門にある正則講習所に通うこととなった[24]。（拙訳）

姜香蘭は、女性も一人の人間であること、男性と同様な人間であることを主張するために、断髪と男装を断行した。その結果、通っていた学校から追い出された姜香蘭は、上海や東京へ渡り、社会主義に心酔、また映画の俳優として活動し、1928年から抗日女性運動団体である「槿友會」の執行委員として女性解放運動を展開した[25]。その生き方が当時の女性に大きな影響を与えた。

さらに、実業者として名声を博した妓生もいた。1935年『東亜日報』には、金玉嬌という妓生が60万ウォン（現在の約720億ウォン）をかけて、京城に朝鮮風のホテル「天香園」を建てて経営した。

当時、彼女の年齢は33歳、天香園という料亭の女将であった[27]。彼女は当時の一般的な妓生と同じく、貧しい家計を助けるために妓生になった。しかし、美貌と知恵で成功をつかみ、ホテルの経営者にまで上り詰めたのである。しかも、彼女は愛国館建立資金に多額の金を寄付するなど、社会活動をも行っていた[28]。そうした彼女の成功は妓生世界のみならず、国中の女性たちの憧れの存在となったのは言うまでもないが、このように妓生が注目されると、幼い娘を妓生として入籍させる親が後を絶たなかった[29]。

実際、1930年代当時、妓生の収入は【表1】が示しているように、他の職業の賃金よりもはるか

に高い。当時バス代は0.8ウォン、銀行員の月給（ボーナスを含む）は70ウォン、肉体労働の日当は0.5ウォンである。妓生の収入が如何に高かったことが分かるが、当然ながら、このような高収入を上げるのはあくまでもごく一部の妓生のみである。

【表1】1930年代女性の収入[30]

職業		収入
女店員		0.7ウォン （労働日を月25日に計算すると月17.5ウォン）
バスガール		0.74ウォン （労働日を月25日に計算すると18.5ウォン）
カフェ女給		5.6ウォン （労働日を月25日に計算すると140ウォン）
女教員		45ウォン
妓生	朝鮮券番 朴小香	半年間の統計396ウォン （月66ウォン）
	漢城券番 鄭月	半年間の統計523ウォン （月87.1ウォン）
	鐘路券番 崔錦蘭	半年間の統計1,875ウォン （月312.5ウォン）

このように見てくると、当時の妓生は単に男性を相手に金銭ばかりを目的に働いていたのではなく、自由恋愛の実践や女性解放運動、ホテル経営、慈善事業などを通して儒教規範に縛られていた韓国社会に新たな風を吹き込んでいたことが分かる。

3. 遊郭の出現と堕落していく 妓生

しかしながら、時代の寵児となった妓生は、前述の如く、ごく一部に過ぎなかった。多くの妓生は貧困のため身を売るしかなかった。それゆえ妓生は社会的に非難の対象となった。1920年代頃から新聞の見出しには、「花柳界の女性」に誘惑されて人生を棒に振った男性のことがしばしば掲載され始めた。

「朝鮮の芸娼妓の数」『東亜日報』（1924年5月9日2面）、「妓生と浮浪者が富豪子弟誘引」（『東亜日報』1924年6月10日2面）、「一生を結縛した芸娼妓の身代金」（『東亜日報』1927年2月15日2面）、「土地分巻預けた金　妓生に消費」（『東亜日報』1926年9月25日5面）、「料亭で妓生と五年間遊興」（『東亜日報』1926年11月13日2面）、「印刷工が富豪仮装　妓生家で遊興」（『東亜日報』1927年1月11日2面）、「公金を横領　妓生を落籍」（『東亜日報』1928年8月18日5面）、「妓生に情が移り　公金を横領消費」（『東亜日報』1929年10月12日7面）、「蕩児　妓生にあげた八百圓返還訴」（『東亜日報』1930年10月28日6面）など。

このように、妓生と男性、金銭をめぐる新聞記事が後を絶たなかった。ついには「酌婦廃止運動誰の罪か（下）」（『東亜日報』1927年5月3日3面）や「妓生撤廃論」（『東光』1930年2月号）まで論じられるようになった。そして、「花柳界の女性」は近代化にともなうもう一つの社会的な問題として浮上してきた。次第に増えていく「花柳界の女性」をめぐる事件に危機感を抱いた当時の朝鮮社会は妓生廃止運動を行った。しかし、貧困という根本的なことが解消されない限り、彼女たちを売春業から辞めさせることはできなかった。

今から約50年前に、法律で公娼を廃止したことがあります。当初は公娼に属していた女性たちが自由を得たと喜びました。しかし、わずか数日が過ぎると、彼女たちは、再び公娼を許可してほしいと官庁に殺到したそうです。彼女たちに理由を聞いたところ、このようなことでした。公娼から解放され、自由の身になったことは嬉しいことだが、仕事がなくなって生活ができなったというのです。これから分かるように、公娼や酌婦をなくすには何よりも社会が、彼女たちに生計を立てるようにしてあげなければなりません。食べ物もあげて、着る物もあげなければならない、それができなければ、生活ができる職業を与えるべきです。そうしなければ、公娼や酌婦を辞めなさいといっても飢え死と堕落を入れ替えろということに過ぎません[31]。（拙訳）

「花柳界の女性」を代弁するこの記事から、妓

生たちは近代化にともなって身分的には自由になれたものの、生活そのものは改善されるどころか、むしろ悪化されていたことが分かる。貧しい家計を助けるために仕事を求めて社会に出たとしても、学びもなく職に就いたことのない女性たちが出きることは身を売ることしかなかった。その結果、多くの女性が自分の意思に関係なく、娼婦となったが、これには1920年代の韓国社会の経済事情が深くかかわっている。

1918年の土地調査事業によって、農民の7割が小作農に転落し、貧困が深刻な社会問題と化した。農民たちは貧困に耐えられず故郷を離れ、都会や満州などへと出ていったり、妻や子どもを売って生計を立てたりした。そのような実状は紙面を通して多く報じられた。

> 「本妻を売放」(『東亜日報』1925年1月22日2面)、「三女を中国人に売放」(『東亜日報』1925年2月10日2面)、「間島同胞　草根木皮に子女売放」(『東亜日報』1925年3月12日2面)、「飢饉に耐えず妻を臨時売放」(『東亜日報』1926年9月18日2面)、「生活困難で愛妻を売放」(『東亜日報』1927年7月30日7面)、「不貞な妻　遊廓へ売放」(『東亜日報』1928年11月6日2面)、「詐欺結婚後　遊廓へ売放」(『東亜日報』1930年1月7日3面)など。(下線筆者)

これは貧困の末に妻や子供を売り飛ばしたことに関する新聞の見出しである。注目すべきは、下線で示したように、1928年頃から女性たちが「遊廓」へ売り飛ばされる記事が目立ちはじめたことだ。

そもそも、近代以前の韓国には、江戸時代の日本の吉原のように公に売春が行われる「遊廓」というものもなければ、身を売る「花柳界の女性」も存在しなかったことだ[32]。それが、近代になって売春を行う「遊郭」という姿で登場し、貧困に喘ぐ底辺の家庭の女性たちが家族の窮乏を助けるために売られていったのである。

1876年の日朝修好条規後、釜山や仁川、元山といった韓国の主要都市が次々と開港されると、西日本各地から商人や海運業者、白木綿業者が渡航してきた。そのうちこれらの業者とともに多数の日本人が韓国に移住するようになり、釜山など開港地を中心に日本人居留地が作られた。これらの居留地は日清･日露戦争を経て拡大し続けたが、問題は初期の渡航者のほとんどが独身男性だったことである。彼らの中には風俗を乱す事件を引き起こすものも少なくなく、こうした男性たちの息抜きの場として居留民の多い釜山に「遊郭」の設置が許可され、それが儲かるとなると、東京の「吉原遊廓」が乗り出し、以後【図7】のように、仁川、元山、京城などの居留地に次々と「遊廓」が設けられた。これが当時の韓国における公娼制度のはじまりである[33]。

【図7】1904年京城所在の新町遊郭[34]

こうして作られた「遊郭」に当初は日本から吉原などにいた遊女たちが渡ってきて営業を行った。しかし、日本人遊女では足りなくなってくると、韓国人女性が全国から集められて送り込まれた。

「遊郭」の導入とその拡大によって、韓国にはこれまでのない性売買が急増加した。李能和(1869-1943)は、「京城には本来カルボ(売春婦)はいなかったのに、高宗甲午年(1894)以後繁盛するようになった。人々は国が衰亡する兆候であると話したが虚言ではなかった[35]。」と嘆いた。その現実を物語っている玄鎭健(1900～1943)の『故郷』(1926)には、次のような歌が歌われている。

> 稲のとれる田んぼは新作路になり
> 少しの学のある友は監獄に行き
> キセルを払い落とす力のある老人は共同墓地に行き
> 顔立ちのよい娘は遊郭に行き[36]
> (拙訳、下線筆者)

下線から分かるように、小作農に転落した農民たちが窮乏の家族を救うために、妻や娘、姉、妹たちを「遊郭」に売り飛ばすという悲惨な現実を唄ったものである。その数、何10万人とも言われるが、もはや彼女たちは自由恋愛を楽しむどころではなかった。華やかな芸を売っていた妓生たちは、いつの間にか身を売る娼婦に転落した。

4. 都市化と女給の出現

一方、1930年代に入ると、新たな「花柳界の女性」としてカフェの「女給」が現われた。近代化とともに盛んになってきた享楽文化は、妓生や遊女を中心とする料亭や遊郭だけでは間に合わなくなってきた。【図8】のように京城の明洞や鐘路という中心地には、ダンスホールやカフェなどの近代都市文化が形成されたが、中でもとりわけ都会人に愛された場所はカフェなのであった。

【図8】1930年代京城の繁華街[37]

カフェは、1920年代東京で盛況だったものが日本人によって京城にもたらされたことで、その新しい空間は韓国人にとって不慣れな場でありながらも新鮮な衝撃を与えたと言う[38]。

ソ・ジヨンは、この新しい空間である「カフェ」とその場で働く女性、すなわち「女給」について以下のことを指摘している。

> 1930年代、盛んになったカフェは、西欧の嗜好品と趣向を基に新しくて多様な遊戯様式が開発された都市遊興空間であった。ジャズとウエートレスに代表される当時のカフェは、日本の大正時代のカフェ文化の影響を受けたが、何よりも金（チップ）を媒介として女給と男性顧客間の遊戯的出会いを提供したという点が特徴的である。当時、カフェの顧客は実業家、会社員、銀行員、店員、学生、先生、記者、モダンボーイ、浮浪者、知識人の文学者などだったが、彼らは、新女性の外観である女給と「類似恋愛」を楽しむことができる空間でもあった。
> 女給は1930年代植民地朝鮮の都市空間に浮上した新しい形態の労働者層だった[39]。（拙訳）

1930年代の京城に位置するカフェの入り口に示されている【図9】の「サッポロビール」の字でも分かるように近代都市において、新たな空間となったカフェは【図10】のような「西洋式」の酒場として、これまでの料亭や遊郭のように酒と女性が共存する場所であった。

【図9】カフェ「銀座」現ソウルの忠武路[40]

【図10】1930年代カフェ「銀座」の内部[42]

したがって、「カフェ」の「女給」は、近代における新たな職業として、これまで「新女性」と「妓生」などの専有物とされた「自由恋愛」の「類似恋愛」の相手にもなった。つまり、もう一人の「花柳界の女性」として「カフェ」の「女給」が浮かび上がったのである。

【図 11】カフェの女給[45]

当時、人気のある「カフェ」の「女給」は【図11】のように女学生の制服を着て、コーヒーと酒を売りながら、売春も同時に行っていた。また、彼女たちは専門的な教育を受けた妓生に対して、女工のような単純労働であるため就職も容易であり、収入も女工に比べてはるかに高かったため、生活困難に追い込まれた女性たちが、自らその道を選んだケースが多く、数的に見ても見過ごすことができるものではなかったようである[43]。そのような状況について、以下のような論説がある。

> カフェの女給という職業は、もう行くとことまで行き着いた、これ以上落ちぶれるところのない女性たちが選択するどん詰まりのような場所である。（中略）
>
> 前近代的な妓生であっても、近代的なカフェ女給であっても、女性のサビース業は新女性とは違って最も卑しい職業として人生の根拠を探せない女性たちが選択しやすい職業であった[44]。（拙訳、下線筆者）

近代化とともに、女性の社会進出は以前にもまして増えたが、貧しい生活のゆえに、教育を受けることができなかった女性たちは、結局、自分の意志であろうとなかろうと花柳界に身を染めるしかなかった。しかし、その中でも「カフェ」の「女給」の認識は下線で示したように「もう行くとことまで行き着いた」、それ以上選択の余地のない最も低いレベルの職業として位置付けられたのである。主に売春を行う、つまり公然として性的なサビースで生計を立てる女性というイメージが「女給」に付きまとった。「女給」を主人公として高い評価を得た[46]兪鎭午の『蝶々』（1940）の冒頭には「バナカフェにいる女性たちの世界といえば、みんな第一は酒、第二は男であるが、プロラはまだ酒が飲めないので、彼女には唯一男の世界のみである[47]」と、「女給」のイメージを定義している。ホン・ソンチョル氏は、その著『遊郭の歴史』（2007）において、

> 当時、カフェの女給のほとんどは私娼の女性であった。それゆえ金を渡すと売春を行った。（中略）もちろん、全てのカフェの女給が売春を行ったわけではないが、カフェや喫茶店における退廃文化の拡大は、1930年代に入ると急速に拡大し、私娼の始発弾となった[48]。（拙訳）

と、述べている。「女給」という名の下で、実は彼女たちの実態は売春婦であったことが読み取れる。しかし、売春を行っているという実際の認識とは違い、「女給」たちは近代都市における享楽文化の中心になっていった。

外見そのものが売り物であった彼女たちは、「新女性」や「妓生」のように断髪はもちろん、派手な洋服を着るなど、モダンガールを追求する姿に変りつつあった。また、職業訓練という目的で日本のカフェを訪問したり、さらに日本人の客を相手にするために東京や大阪など、日本の大都会に移住することもあった。このような様子は、妓生と同様に植民地時代を生きる「底辺の女性」たちが、生存のため、金銭を求めるため、新たな道を歩むことになったと評価されているが、当然ながら社会に及ぼした影響も大きかった[49]。1934年『東

亜日報』には、「頽廃気分と施設取締問題」という見出しで、その弊害について次のように報じられている。

つい最近まで聞いたこともなかったカフェやバーなどという所が、もはや都会人の間で話題になっている。（中略）

それはネオンサイン、近代的建築、家具装飾、日本酒、洋酒、レコード、薄暗い色灯の下で、肉体に代表するエロチックなサビースとして現れた怪物である。そのため、変わった魅力を持って都市の青年の足を立ち止らせる。昨年の末現在、その数は420個所に達しており、女給の数は2,489名に達している。もはや朝鮮の都市はカフェの雰囲気に包まれたというだけに驚くほどのテンポで増えていくことになった[50]。（拙訳）

「頽廃」という見出しでも分かるように、近代的な都市文化が進められていく中、「カフェ」が「エロチックなサビース」のある場として定着していることが覗える。そして、「女給」の数が2,489名もいるという実態から様々な問題も発生してきたのである。とりわけ、1920年代後半から1930年代にかけて「風紀紊乱」に関する事件は後を絶たなかった。その一端を次にあげると、次の通りである。

「『カフェ』厳重取締」（『東亜日報』1927年6月15日3面）、「カフェ取締」（『東亜日報』1932年7月20日3面）、「ドライブしていた女給　検問され」（『東亜日報』1934年2月20日3面）、「不当な請求した各酒保を取締」（『東亜日報』1934年9月19日2面）、「「カフェ」と「バー」に「学生勿入」を規定」（『東亜日報』1935年1月12日2面）、「極度の風紀紊乱は広告「エロ」にもエロチックな絵も貼り　カフェ、バーに徹底な警告」（『東亜日報』1935年2月24日3面）、「平壌のカフェにも学生立ち入り禁止」（『東亜日報』1935年6月30日3面）、「「カフェ」と「バー」の新規不許可」（『東亜日報』1938年9月6日3面）、「「カフェ」でのダンス厳禁」（『東亜日報』1939年4月22日3面）など。

中でも、1937年『東亜日報』の「横説竪説（世迷い言）」という記事には、「近代とともに輸入された男女関係の接近と紊乱が度を超えて奇怪である。もう一つはカフェの女給に夢中になり、真面目に職に就かなかった結果、失職と同時に彼女に冷遇を受けた。」[51]と、厳しく非難している。このように、近代都市文化として現われた「カフェ」と「女給」は、当時の社会に物議を醸すようになり、警戒の対象として扱われていたのである。

おわりに

以上、本稿では韓国の近代史において最も魅力的な女性の一人、あるいは体制を揺るがした女性の一人と言われる「妓生」や「遊女」、「女給」といった「花柳界の女性」に注目し、社会的弱者に過ぎなかった彼女たちが、なぜ社会の注目を集めるようになったのか、その実態について見てきた。

韓国における「花柳界の女性」は本来、芸を売る「総合芸術家」であったが、近代とともに、その美貌によって新聞・雑誌のモデルとして世間の注目を集めるようになった。また、中には自由恋愛を広めたり、女性運動を展開したり、事業を起こしたりするなど、当時の一般女性の生き方に大きな影響を及ぼす者もいたりした。しかし、彼女たちが社会的に影響力を行使したとしても、結局、「花柳界の女性は花柳界の女性」に過ぎなかった。とりわけ、男性たちにとって彼女たちは、男性から金銭を奪い取る「悪女」と見做され、常に非難の対象となった。

「妓生」をはじめ「遊女」、「女給」といった「花柳界の女性」たちは、近代化という時代の変わり目に、最も変貌を遂げた存在として当時の社会に大きな影響を与えた女性たちであった。

[1] ホン・ソンチョル『遊郭の歴史』(paperroad、ソウル、2007）22-25 頁。
[2] 黄真伊は両班の父親と妓生である母親の間で生まれ、母親の身分に従う朝鮮制度の身分制度で生まれながら賤民である。彼女は多数の逸話と詩を残した最も有名な名妓である。川村湊『妓生』(作品社、2001）54-62 頁。
[3] 論介は、晋州牧の官妓であったが 1593 年壬辰倭乱中晋州城が日本軍に陥落すると、倭将を誘引して殉国した義妓で有名な妓生である。イ・ドギル『世界を変えた女性たち』(オクダン、ソウル、2009）461-462 頁。
[4] 成春香は古典小説の『春香伝』の主人公で節介の強い魅力的な女性として愛されている作中人物である。川村湊、前載（註 2）86-87 頁。
[5] シン･ヒョンキュン『花を掴んで』(トクキョン、ソウル、2005）7 頁。
[6]「解語花」は、言葉が分かる花という意味で、楊貴妃の美しさに見惚れた唐王朝の玄宗が「何如此解語花也」と言ったのが由来である。美女あるいは妓生を称する言葉である。
[7] イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行』(講談社学術文庫、1998）449-450 頁。
[8] イ・サンヒ『花で見る韓国文化 1』(Nexusbook、ソウル、2004）212 頁。
[9] 朝鮮時代、政治・経済体制の基礎であった身分制度は、甲午改革（1984-1986）によって廃止され、白丁や妓生などの賤民も身分制度に捕われない自由の身になった。
[10] イ・キョンミン『妓生はどのように作られたのか』(写真アーカイバー研究所、ソウル、2005）22 頁。
[11] 川村湊、前載（註 2）125 頁。
[12] シン・ヒョンキュン、前載（註 5）35 頁。
[14] 釜山近代歴史館『絵葉書で旅立つ近代紀行』(民族院、ソウル、2009）102 頁。
[15] シン・ヒョンキュン、前載（註 5）160 頁、197 頁、201 頁、219 頁。
[16]「梨専演劇の夜　超満員の大盛況」(『東亜日報』1933 年 10 月 8 日 6 面)。右一番目が王壽福。
[17] 1895 年、何百年間に渡って韓国の女性を縛りつけていた再婚禁止法が解かれた。しかし、韓国社会が女性の再婚を認め、一般化されるようになったのはごく最近のことである。
[18]「康明花自殺の内膜は非常に複雑」(『東亜日報』1923 年 6 月 15 日 3 面)、「花のような身が命を絶つまで」(『東亜日報』1923 年 6 月 16 日 3 面)、「康明花の自殺について」『東亜日報』(1923 年 7 月 8 日 6 面）などが報じられ、『康明花恋愛唱歌集』(世界書林、1924）と『康明花實記 - 千秋に怨恨を抱いて神聖な恋愛に犠牲になった絶代佳人』(鴻文堂、1926）などの書籍も出版された。
[19]「花のような身で命を切るまでに」(『東亜日報』1923 年 6 月 16 日 3 面)。当時、康明花の逸話は小説となり、人気を得ていた。彼女に自殺が当時社会に大きな影響与えたことを証明している。シン・ヒョンキュ『妓生　朝鮮を惹きつける』(語文化社、ソウル、2010）121 頁。
[21] 羅蕙錫「康明花の自殺について」(『東亜日報』1923 年 7 月 8 日 6 面)。
[23]「断髪娘 (一)- 花柳界から学窓生活へ」(『東亜日報』1922 年 6 月 22 日 3 面)。
[24]「断髪娘 (二)- 華麗な空想は一場の春夢」(『東亜日報』1922 年 6 月 24 日 3 面)。
[25] ハン・サンクォン「1920 年代女性解放論 - 断髪論を中心として」『史学研究　第 87 号』(韓国史学会、ソウル、2007）161 頁。
[27]「朝鮮式ホテル 天香園主人が計劃」(『東亜日報』1935 年 10 月 30 日 2 面)。
[28]「愛国舘資金　金女史千圓寄附」(『東亜日報』1937 年 11 月 12 日 2 面)。
[29] シン・ヒョンキュン、前載（註 5）41 頁。
[30] 同上。また、シン・ヒョンキュン『妓生の物語 - 日帝時代の大衆スター』(サルリム、ソウル、2007）47 頁に基づいて筆者作成。
[31]「酌婦廃止運動　誰の罪か（下）」(『東亜日報』1927 年 5 月 3 日 3 面)。
[32] 前述の如く、朝鮮時代まで妓生あるいは妓女というものはあったが、酒席が設けられたときに面倒を見る役割が本業であった彼女たちは、性交は酒を注ぐ付随的な行為であった。また、特定な人のみ相手にした。奴隷のように性を売らなければならない売春行為を国家が公認してその営業を許諾したことはなかった。本来、朝鮮社会は女性の純潔と貞節を強要した社会であり、近代社会で移行しながら引き起こされた性議論の陽性化とその混乱の中でも社会的な道徳観念は相変わらずだった。チョン・キョンオク外『韓国女性文化史』(淑明女子大学校アジア女性研究所、ソウル、2004) 314 頁。
[33] 丁貴連「時代の『悲哀』の悲哀としての「少年の悲哀」」(『宇都宮大学国際学部研究論集　第 21 号』(宇都宮大学国際学部、2006）4 頁。
[34]「東亜日報の中の近代 100 景 <20> 遊郭の誕生と影」(『東亜日報』2009 年 10 月 30 日 A 33 面)。
[35] 李能和著、イ・ジェゴン訳『朝鮮解語花史』(トンムンソン、ソウル、1992）224 頁。
[36] 玄鎭健『玄鎭健短編全集』(カラム企画、ソウル、2006）311-312 頁。
[37] 釜山近代歴史館、前載（註 14）75 頁。
[38] ウ・ジョンクォン「30 年代京城と東京の｀カフェ｀遊興文化比較研究」『韓国現代文学研究 第 26 号』(韓国現代文学会、2006）338 頁。
[39] ソ・ジヨン『歴史に愛を尋ねる』(イスプ、ソウル、2011）282 頁。
[40] 進興院ホームページ「京城の遊興文化空間」http://moderncafe.culturecontent.com/asp/index.asp（2012 年 5 月 4 日検索)。
[42] 同上。
[43] 1930 年代、女工の平均月収 6-30 ウォンに比べて、女給は平均月収 70-80 ウォンであった。大邱三笠町　徐丙桂「女高出身であるインテリ妓生・女優・女給　座談会」(『三千里』1936 年 4 月号）162 頁。
[44] チェ･ユチャン『韓国近代文化と朴景利の土地』(ソミョン出版、ソウル、2008）244 頁。
[45]「鐘路夜話」(『女性』1938 年 9 月号）75 頁。女性たちの名札には、左側よりシャリ、アンナ、メリ、アイラという名前が書かれてある。
[46] 文藝時評（一）文学人の生活意識（『東亜日報』1940 年 3 月 24 日 3 面)。
[47] 現代文学社編『新韓国文学全集　第 9 巻―兪鎭午・沈熏選集』(語文閣、1978）261 頁。
[48] ホン・ソンチョル、前載（註 1）129 頁。
[49] ソ・ジヨン「植民地朝鮮のモダンカール―1920-30 年代

京城の街の女性散策者」『韓国女性学研究　第22号』（韓国女性学会、2006）221頁。

[50]「頽廃気分と施　設取締問題」（『東亜日報』1934年09月16日1面）。

[51]「横説竪説（世迷い言）」（『東亜日報』1937年9月8日1面）。

参考文献

〈日本語〉

イザベラ・バード、時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社学術文庫（1998）

李在銑著、丁貴連外訳（2005）『韓国文学はどこから来たのか』白帝社

川村湊『妓生』作品社（2001）

趙恵貞著、春木育美翻（2002）『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局

羅蕙錫著、渡辺澄子監修（2010）『近代韓国の「新女性」羅蕙錫の作品世界―小説と絵画』オークラ情報サービス

〈韓国語〉

イ・キョンミン（2005）『妓生はどのように作られたのか』写真アーカイバー研究所

イ・サンヒ（2004）『花で見る韓国文化1』Nexusbook

イ・ドギル（2009）『世界を変えた女性たち』オクダン

イ・ベヨン（1999）『韓国の女性たちはどのように暮らしたのか』青年社

李能和著、イ・ジェゴン訳（1992）『朝鮮解語花史』トンムンソン

カン・ジュンマン（2007）『韓国近代散策』人物と思想社

キム・キョンイル（2004）『女性の近代、近代の女性』プルン歴史

現代文学社編（1978）『新韓国文学全集　第9巻―兪鎭午・沈熏選集』語文閣

シン・ヒョンキュン（2005）『花を掴んで』トクキョン

――――――（2007）『妓生の物語 - 日帝時代の大衆スター』サルリム

――――――（2010）『妓生、朝鮮を引き付ける』語文学社

ソ・ジヨン（2011）『歴史に愛を尋ねる』イスプ

ソ・ジョンジャ（2001）『晶月羅蕙錫全集』国学資料院

ソン・インス（1977）『韓国女性教育史』延世大学出版部

チェ・ユチャン（2008）『韓国近代文化と朴景利の土地』ソミョン出版

チェ・ヘシル（2000）『新女性は何を夢見たのか』センガゲナム

チョン・キョンオク外（2004）『韓国女性文化史1』淑明女子大学校アジア女性研究所

玄鎮健（2006）『玄鎮健短編全集』カラム企画

釜山近代歴史館（2009）『絵葉書で旅立つ近代紀行』民族院

ホン・ソンチョル（2007）『遊郭の歴史』paperroad

ムン・オクビョウ外（2003）『新女性』青年社

謝辞

この論文を書くにあたって、日ごろより暖かいご指導を頂き、完成まで励まして下さった丁貴連先生に厚く御礼申し上げます。また、有益なご意見とご協力を頂いた国際学部の先生たちにもこの場を借りて心より感謝の意を表します。

한국의 근대화와 여성
—「기생」과「유녀」, 그리고「여급」을 중심으로—

Korea's Modernization and Woman
—Focusing on "Gisaeng", "Yujyo" and "Jyokyu"—

김다희
(Kim Dahee)

〈요지〉

근대 이전, 한국 사회의 여성는 유교규범을 지키고 특히 자신의 몸을 철저히 지켜나가는 것만이 존경받았으며 이상적인 여성으로 숭배되었다. 하지만 근대화와 더불어 서양에서 들어온 자유와 평등 사상에 준한 새로운 교육을 받는 사람들이 늘어남과 동시에 여성의 의식도 변화를 가져왔다. 특히, 결혼상대를 자신의 의지대로 선택할 수 있는 권리를 알게된 여성들은 모두가 자유로운 사랑을 추구하게 되었다. 이른바「구여성」에 대립되는「신여성」이라 불리우는 여성들이 나타난 것이다. 그리고「신여성」들은 긴 시간 동안 자신들을 얽매고 있었던 유교규범으로 부터 벗어나기 위해 서양의 새로운 결혼문화와 자유연애풍습을 적극적으로 받아 들였다.

물론, 자유연애의 물결은 근대 교육을 받은「신여성」뿐만이 아니었다. 사회의 관심이 미치지 않는 하민층, 특히「기생」과「유녀」,「여급」이라 불리우는「화류계 여성」들도 그 영향을 받았다. 게다가 그녀들은 일반 여성을 선도하는 자유연애를 실천했다. 즉, 일반 여성을 리드하는 근대의 유행과 소비의 선두에 서 있었던 것이다.

한국에서의「화류계 여성」은 원래 결혼제도에서 벗어난 사회적 약자이다. 하지만 근대화와 함께 사회의 전면에 나타나기 시작하며, 자유연애에 관해서는 일반 여성을 리드하는 등 사회적으로 영향력을 가진 여성으로서 주목을 받게 되었다.

본고에서는 한국의 근대사에 있어서 가장 매력적인 여성, 혹은 체제를 흔들어 놓은 여성이라 평가되는「기생」과「유녀」,「여급」으로 불리우는「화류계 여성」에 초점을 맞추어 사회적 약자에 지나지 않던 그녀들이 왜 사회적 주목을 받게 되었는지를 살펴 보았다.

(2013 年 7 月 16 日受理)